

2019年11月18日付 鋼構造ジャーナル

広島県鉄構工業会が中間報告 高力ボルト拡大孔実験など

建築学会中国支部・鉄骨製作部会

日本建築学会中国支部・
鉄骨製作部会は9日、広島
市中区の広島工業大学広島
校舎で第2回例会を開いた。



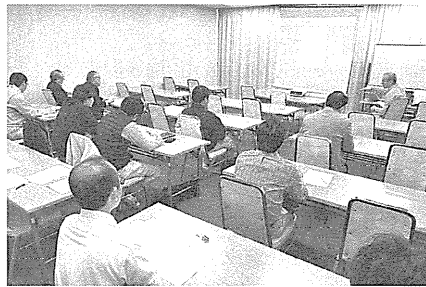
清水教授

当日は広島県鉄構工業会（理事長＝山本泰徳・ステントス社長）が参画する「拡大孔を有する亜鉛めつき高力ボルトの孔拡大1面摩擦接合のすべり係数」（ボルト径＋3ミリの1面摩擦接合含む）の試験結果の中間経過を報告。実験を担当した広島工業大学工学部建築学科の清水斉教授は「すべり耐力については余裕のある値が得られた」と述べた。同事業は全国鐵構

工業協会の「鉄骨技術研究開発補助制度」を活用したもので、昨年から継続している。今後は計測データの解析を進め、その結果を発表する。

このほか、①亜鉛めつき柱における高力ボルト孔部のめつき厚さに関する基礎的研究②開先専用防錆剤を塗布した梁の完全突合せ溶接における開先形状と裏当て金の仕様の違いによるブローホール発生状況に関する研究——も発表された。

また、第13回鋼構造シンポジウム「床スラブの横補剛効果について」簡単に求



第2回例会を開催

める方法」（12月7日、広島工業大学広島校舎）や第17回鋼構造実験見学会「端部扁平加工鋼管を用いた立体トラスの鉛直荷重実験」（2020年2月15日）など今後の事業計画が報告された。